

## 2021 年度 大谷大学文藝コンテスト

### 【エッセイ・小説部門】総評

審査委員長 國中 治

今回は、まず応募する方々に苦言を呈する失礼を御容赦いただきたい。エッセイと小説。両部門とも残念な例が多すぎる。これ以上残念な例が増えないように、今のうちに注意を喚起しておかねば、との使命感に私は駆られてしまったのである。

何が残念なのか。内容の問題はひとまず措く。問題は原稿の書き方である。具体的に言えば、縦書きの日本語の文章の書き方、カッコなど記号の使い分け、数字の表記、空白行の使い方、等々が無手勝流であって、そのためせつかくの作品が損なわれている例があまりにも多いのである。「形式に何らかの不都合があっても、文章で大切なのは形式よりも内容だから内容さえ優れていれば大丈夫」などと考えている人がいるとしたら、即刻その考えを改めてほしい。そもそも内容と形式の有機的な連携なくして文学作品は成立しえない（もともと今は、「形式」を即物的な意味に限って用いているが）。

今回は手書きの文字の粗雑さが問題視されて評価を抑えられた作品があった。念のため言い添えると、達筆を求めているわけではない。だが書き殴ったような乱雑な文字の羅列であったり、書き直した箇所に丁寧な処置が施されていなかったりする場合、その杜撰さは書き手のその文章に対する取り組み方のあらわれであると、やはり考えないわけにはいかないのだ。

また手書きの場合、極端に小さい文字や薄い鉛筆書きも審査にマイナスに作用する恐れがある。小さい文字と薄い文字はたいてい重なって生じる現象で、読みにくさの点で相乗効果を発揮する。この効果は読み手が文章を一定のペースで辿っていくのを往々にして阻害する。限られた時間内に多くの作品が幾度もの審査を経る過程で、この「阻害」が複数の審査員の心証形成にプラスに働くとは思えない。とはいえ小さくて薄い文字というのは、筆圧の弱い人にとっては自然な、変えようとしても変えられないものなのだろう。そういう人には文章を手書きでなくパソコンで作成することをお勧めしたい。

ただし、パソコンにも手書きとは異なる問題がある。パソコンの基本は横書きである。だから最終的には縦書きにするつमりの文章でも、作成する際は横書きで文字を打ち込む

人が多い。本コンテストに寄せられる作品の多くもそのようにして作成されたものだと思う。しかし、横書きから縦書きへの変換によって文字や記号に狂いが生じてしまう場合がある。このことを重視している人がどれだけいるだろう。横書きから縦書きへの変換によって生じた異変がほとんどすべてのページに鎮座している作品まである。書き手が気づいていないはずはない。「大した問題ではないだろう」と高を括って、看過するのが習慣になっているのだろうか。こういう場合も、言葉や文章の扱い方が粗忽だとしてマイナス評価が下されることを知らないのだろうか。

さて、エッセイと小説について、形式以外のことにもやはり少しは触れておきたい。立派な文章が直ちに優れたエッセイを保証するとは限らない、と私は考える。インパクトある題材の力は無視できないが、何でもないものやことをふっくらと香ばしく料理して提示するのもエッセイの大切な役割だと思う。表現の品格を保ちつつ、そこにさりげなく緩みや破調を加えて自然な親しみと温もりを滲ませる文章。それがエッセイの理想的具現ではないだろうか。その意味で現在、私の最も信頼するエッセイは石田千『窓辺のこと』である。小説は今回、総じて文章のレベルが高かった。人生の翳りある瞬間をそっと掬い上げた見事な描写にも出会えたし、民話や昔話を活用した夢うつつ感覚の物語も楽しかった。ちなみに後者の方法による小説としては朝井まかて『雲上雲下』が圧巻である。